

事務局通信

第 30 回日本熱帯生態学会年次大会
(オンライン国際カンフェレンス)の開催報告

保坂哲朗 (JASTE30 Online 実行委員長)

2020年6月に予定されていた広島大会が新型コロナウイルス感染症拡大の影響で1年延期されたことにより、発表機会を失った会員の救済策として、第30回日本熱帯生態学会年次大会(オンライン国際カンフェレンス)(略称:JASTE30 Online)を2020年11月21日(土)にオンラインで開催した。

大会には国内外から約120名の登録者があり、通常の年次大会に匹敵する規模となった。また、そのうち4割は外国人研究者や留学生であり、まさに“国際カンフェレンス”にふさわしい大会となった。発表件数は全30件(口頭発表19件、ポスター発表11件)であり、通常大会と同様に、自然科学系から人文社会系まで幅広い内容に関する発表があった。

本大会では口頭発表とポスター発表において、それぞれZoomとLINC Bizというオンライン発表ツールを初めて用いたが、大きな混乱はなかった。海外からの接続もスムーズで、Zoomを使ったスライドの共有や質疑応答、発表者の交代など概ね円滑に進めることができた(午前中の口頭発表において1件接続のトラブルがあったが、発表時間を後の休憩時間帯にずらして発表を行うことができ、特にその後のスケジュールに大きな影響はなかった)。ただ、通常の大会に比べ、質疑応答が少ないように感じた。オンラインでも質問しやすい方法や雰囲気づくりが必要かもしれない。また、LINC Bizを用いたポスター発表においては、最初ポスター掲示や「会場」への入室の方法に戸惑う参加者もあった。しかし、コアタイムまでには大方の問題は解決した様子で、各「部屋」ではチャットによる活発な議論が行われた。

事後アンケートでは、96%の回答者(n = 57)が本大会について「満足」もしくは「やや満足」と回答しており、「不満足」「やや不満足」の回答は0であった。ZoomやLINC Bizについて、これらの使用が「難しかった」と答えた人は、口頭発表に参加したと回答した45名中1名、ポスター発表に参加したと回答した37名中3名のみであった。難しかった理由としては、Zoomについては質問のタイミングや相手に伝わっているかどうか分かりづらかったこと、LINC Bizについては参加やポスターの掲示の操作方法が分かりづらかったことなどが挙げられた。

「JASTE30 Online の
開催報告」
【1 ページ】

掲載記事

- 1 事務局通信
JASTE30 Online の
開催報告 保坂哲朗
- 2 JASTE31 のお知らせ
- 5 書評 小坂康之
- 7 書評 山田俊弘

本大会の良かった点としてはオンライン大会のメリットとして、コスト・時間の節約ができたこと、遠方・海外からも参加できたこと、スライドやポスターが見やすかったことを挙げる参加者が多かった。LINC Biz によるポスターセッションを評価する声も多かった。一方、悪かった点としては、「参加者間の交流・ディスカッションが難しい」、「口頭発表の質問のタイミングが難しい、質疑応答の時間が短い」などが挙げられた。一方で次回大会の開催方法については、54%がハイブリッド型(現地で開催しつつ、オンラインでも参加・発表できるようにする)、30%が現地開催、16%がオンライン開催を希望すると回答し、オンライン開催のみを希望する人は少なかった。

JASTE としては初めてのオンライン大会であったが、実行委員メンバーの丁寧な事前準備や大会中のフォローにより、大きな混乱なく開催できた。国内・国外から多くの人が参加できたことは、オンライン大会ならではの利点であり、帰国留学生など海外の研究者との関係を維持・発展させるのに良いプラットフォームになる可能性を示せた。一方で、参加者間の情報交換や交流に限られるという点は、オンライン大会の難しさであり、この点の“物足りなさ”が次回大会はハイブリッドもしくは現地開催を希望する声の多さにつながっていると考えられる。最後に、本大会を支えて下さった神崎会長、実行委員や座長の皆様、また円滑な大会運営にご協力いただいた全ての参加者の皆様に心より御礼申し上げます。

JASTE31のお知らせ

第31回日本熱帯生態学会年次大会(広島)

大会会長： 奥田敏統
大会実行委員： 山田俊弘, 保坂哲朗, 中林雅

日程： 2021年 6月25日(金) 編集委員会, 評議会
6月26日(土) 一般発表セッション, 総会, 吉良賞授賞式・講演
6月27日(日) 一般発表セッション, 公開シンポジウム
本大会では懇親会は予定しておりません。

大会会場： 広島大学工学部 講義室 〒739-8527 東広島市鏡山 1-4-1
現地参加とオンライン参加の両方を可能にする予定です。現地開催の可否については、4月26日(月)の時点で(1)緊急事態宣言などで首都圏・関西圏をはじめとする他県からの来広に難しい状況ではないか、(2)広島大学がキャンパス内での学会開催を認めているか、という基準に照らして判断する予定です。ただし、この期日以降もコロナ禍の状況が悪化した場合や、現地参加希望者が少ない場合は完全オンライン開催に切り替える可能性もあります。

大会ウェブサイト： <https://jaste31.hiroshima-u.ac.jp/index.html>
地図, 交通, 最新情報, 英語での情報は、上記ウェブサイトをご参照ください。
大会当日まで随時更新していきます。

大会事務局：
〒739-8521 東広島市鏡山 1-7-1
広島大学大学院 統合生命科学研究科内 JASTE31 実行委員会
電子メール: jaste31@hiroshima-u.ac.jp 電話: 082-424-6513 (奥田敏統)

発表・参加方法

1. 口頭発表: 通常の現地での発表・参加に加えて、Zoomなどを用いたオンラインでの発表・参加も可能とする予定です。
2. ポスター発表: LINC Biz などオンライン発表ツールを用いて発表を行います。また、オンライン発表と同内容のポスターを現地で掲示し、発表することも可能とします。質疑応答は現地およびオンラインで可能とする予定です。

公開シンポジウム：「サプライチェーンと熱帯林保全（仮題）」

日時： 2021年6月27日(日) 13:00～16:30（予定）

会場： 広島大学工学部 講義室（一般市民にはオンライン配信を予定．事前登録が必要．）

内容： 途上国と言われる地域の森林保全には、温室効果ガス削減の視点から REDD+などのトップダウン型インセンティブメカニズムが定着しつつあるが、その一方で、熱帯農産物の調達元～流通までのサプライチェーンマネジメントも生態系全体の荒廃抑止力として注目を集めている。この背景には、農産物生産の「在り方」が森林資源や周辺生態系保全・管理に大きく影響を与える—という視点が挙げられる。農産物の生産・流通プロセスの透明化およびその過程で発生する CO₂ 削減努力などが、企業コンプライアンスとして定着し、森林を含む調達元の環境への配慮姿勢が企業価値そのものとして問われるようになったこともその背景の一つである。そこで、本シンポジウムでは、まず、熱帯農産物に係るサプライチェーンの現状について、企業の取り組みについて紹介を頂き、そのうえで、これまでの森林減少・劣化抑止プログラムも含めた生態系保全の立場から、意見交換をする場としたい。また、こうした取り組みと議論の場が、「遙かなる熱帯林」から、「身近な熱帯林」へと、世の中の関心を引き寄せる機会となり、環境教育などへの波及効果となることを期待したい。

学会間連携：

第 31 回日本熱帯生態学会年次大会では、関連分野の研究者との交流を深めるために、次の 8 つの学会と連携して大会を実施します：

日本アフリカ学会、日本サンゴ礁学会、日本マングローブ学会、日本タイ学会、日本熱帯農業学会、日本泥炭地学会、東南アジア学会、日本島嶼学会

（これら連携学会の会員は、当学会の会員と同条件で研究発表できます）

優秀発表賞：

学会長による優秀発表賞を、口頭発表・ポスターの双方で設定します。複数のレフェリーによる厳正な審査を行います。審査基準など詳細は、大会ウェブサイトで後日公開します。同制度へエントリーする場合には、大会参加申し込みの際に所定欄にチェックをお願いします。

参加申し込み：

申し込み用ウェブサイト <https://forms.gle/LSZtm6Q1LBMnXY5n9> にて、必要事項を記入し、送信下さい。ウェブサイトからの申し込みが難しい場合は、実行委員会までご相談ください。なお、発表者は日本熱帯生態学会会員と上記の連携学会会員に限ります。これらに該当しない方で、研究発表を希望する場合は、JASTE 会員管理窓口 <jaste@soubun.com> に連絡し、事前に会員登録を行ってください。

研究発表される方は大会参加申し込みを **4月30日(金)17時**までに済ませてください。

要旨提出締め切りは **5月21日(金)17時必着**です。また、大会参加申し込みの最終締め切りは **6月23日(水)17時**です。これ以降に申し込んだ場合は、一部の企画に参加できないことがあります。

講演要旨：

研究発表をされる方は、講演要旨を 1 ページにまとめ、**5月21日(金)17時**までに大会事務局 <jaste31@hiroshima-u.ac.jp>あて電子メールで添付ファイルとしてお送りください。ファイル形式は MS Word (.docx) を用いてください。講演要旨は、以下の様式で作成願います（テンプレートを大会ウェブサイトからダウンロード可能です）。

- ・余白は上下左右とも 25 mm.
- ・タイトル(第 1 行)と氏名・所属(第 2 行)は、更に 25 mm 下げる(用紙左端からは 50 mm).
- ・発表者の氏名の右上に○印をつける。
- ・本文と氏名・所属(第 2 行)の間は 1 行あける。
- ・図表を挿入する場合は白黒とし、余白からはみ出ないように貼り込む。

参加費（オンライン参加でも現地参加でも同額）：

前納大会参加費(5/21 まで)：一般(学生以外) 5,000 円/学生 2,500 円

大会参加費(5/22 以降)： 一般(学生以外) 6,000 円/学生 3,000 円

・お支払いされた参加費はお返しできません。

・参加費支払いに係る領収書は、「払込取扱票の受領書」もしくは「銀行等の受領書/領収書」などをもってかえます。

・本大会では懇親会を予定しておりません。

発表参加申し込みと前納送金の締め切り：

発表参加の申し込みの締め切りは 4 月 30 日(金)、参加費の前納締め切りは 5 月 21 日(金)とします。

郵便局から郵便為替による送金：

口座番号: 01300-3-110802

口座名: JASTE31実行委員会

口座名(カナ): ジャステサンジュウイチジッコウイインカイ

※郵便局で青色の払込取扱票を使用して下さい。

※払込取扱票の通信欄に、必ず送金内訳(一般/学生の別)を記載して下さい。

銀行からの振込みによる送金：

銀行名: ゆうちょ銀行

店名: 一三九(イチサンキュウ)店(139)

口座種類: 当座

口座番号: 0110802

口座名(カナ): ジャステサンジュウイチジッコウイインカイ

※ 銀行送金の場合には、必ず振込時にメールで氏名、送金内訳(一般/学生の別)を大会事務局 <jaste31@hiroshima-u.ac.jp>に連絡して下さい。メールの件名は「送金内訳」として下さい。メール送付に困難のある方は実行委員会までご相談ください。

託児支援：

本大会では、会期中の託児支援を提供する予定です。現地参加でもオンライン参加でも利用可能な託児支援について検討中です。詳細は、大会ウェブサイト随時掲載予定です。

書評

ラップランドの自然と人—リンネのフィールドノートから

塚田秀雄 訳著. 2020 年. 284pp. 古今書院 (価格: 6,000 円 + 税, ISBN 9784772290203)

Book review *Carlos Linnaeus: A Journey in Lapland—Linnaeus's Fieldnotes*. By TSUKADA Hideo. 2020. Kokon-Shoin Publisher, 284pp.

小坂康之 (京都大学 大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

KOSAKA Yasuyuki (Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University.)

2019 年 6 月にラオス北東部の農村を訪問すると、民家の庭先にマツタケが積み上げられていた。シイ林で採れたニセマツタケで、中国国籍の仲買人に販売するという。マツタケは、日本のほか、中国、韓国、北朝鮮、ラオス、ブータン、モロッコ、アメリカ合衆国、カナダ、スウェーデン、フィンランドなどでも採集される(アナ・チン 2019; 山中ら 2011)。東北タイのラオ人の中には、現地に嫁いだ知人を頼って、フィンランドにマツタケやベリー類を採集しに行く人がいるそうだ(アナ・チン 2019)。世界各地のマツタケは、最終的に日本の市場に出荷される。日本を起点にして東南アジアの一地域の林産物採集活動を理解しようと歩き始めると、はるか北欧にたどり着いてしまう。

人・物・情報の動きが加速し、世界が一つに結びつくことで、勉強すべきことが飛躍的に増えた。同時に研究分野は細分化され、分野ごとに最新の知見があふれ、何かを「わかった」気になるまでのハードルが上がった。そのような状況で、本書は曇った視界を晴らしてくれる冷風のような一冊である。

本書は、スウェーデンの博物学者カール・リンネによる北欧ラップランド探検記の和訳・注釈・解説である。リンネは 1732 年 5 月からラップランドを 5 か月間探検した。ラップランドはラップ人(サーミ)が居住する地域で、スウェーデン北部、フィンランド北部、ノルウェー北部、ロシアのコラ半島にまたがる。ラップランドでは当時、スウェーデン、デンマーク、ノルウェー、およびロシアの間で政治経済的競合が強まっていた。そしてスウェーデン領内では、先住民サーミのキリスト教化・スウェーデン人化がすすめられ、鉱物資源の開発も計画されていた。そのような状況で、25 才のリンネは王立科学協会の助成金を得て、総移動距離が 6600km に達する寒帯地域の探検を行った。

ブナやオークの森から出発したリンネは、トウヒやカンバの森でキツネやライチョウに出会い、川を遡上するサケを獲るためのもんどりを観察する。そしてヤナギやミツガシワの生える湿地を渡り、イワベンケイやくモマキンボウゲの咲く高山を越えてゆく。このようにラップランドには、

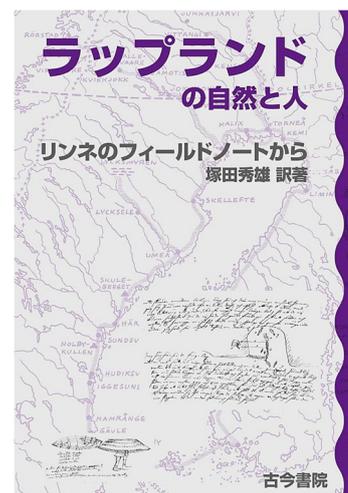
日本でもなじみのある動植物の仲間が多い。鳥獣類の調査では、サーミの狩猟を観察し、時にはリンネ自身が猟銃を撃ち、解剖し、詳細なメモを残した。

リンネの関心は、野生生物にとどまらない。行く先々でサーミに宿泊や食事、道案内でお世話になると、

彼らの生活についても詳細に記録した。サーミは、その生活様式から森林サーミと山地サーミに分けられ、どちらもトナカイの移牧に従事する。トナカイは荷物運搬の役畜であると同時に、その肉やミルクが貴重な食料となる。食料では、スイバ、シシウド、ホロムイイチゴなどの植物も欠かせない。森に優占するカンバは多目的に利用され、その材は樁に、樹皮は靴や雨具や屋根に、樹皮の繊維から布が織られる。医学も学んだリンネの視点は、サーミやフィン人入植者の健康状態にも及んだ。サーミは、頭痛、腹痛、痛風になると、カンバの樹皮を痛む場所に置いて燻す。この温灸療法に対して、リンネは MOXA と記述した。訳者によると、日本のもぐさはポルトガル人宣教師が持ち帰ったことで 17 世紀のドイツではすでに知られていたという。

スウェーデンのキリスト教会は、精霊信仰だったサーミに、週 1 回の教会礼拝を義務付けていた。そのためサーミは険しい山を登り、冷たい川を渡り、深い雪で覆われた道を定期的に往復しなければならなかった。それを見聞きしたリンネの筆は、時に熱を帯びてサーミに寄り添う。リンネの記述は、「サーミは魔術をあやつる蛮族」とみなしたキリスト教会の視点と対照的である。

殖産興業への提言も興味深い。マツの広大な未利用林をみて、ラップランドがスウェーデン最大の木材生産地となる可能性を指摘した。また冷涼で貧栄養な土地は



農業に不向きで、牧畜が重要となる。その問題点として、ウシバエの寄生によるトナカイの病気や、新たに導入したウシのミズドクニンジンによる食中毒死が挙げられた。発見した泉の水質や鉱物の特徴も逐一説明している。

ラップランド探検から戻ったリンネは、1735年に『自然の体系』を執筆し、植物を神の創造した体系として分類し、生物の命名における二名法を提唱した。1737年にはその体系をもとに『ラップランド植物誌』を出版した。しかしリンネは、本書の底本となる『ラップランド旅行』を生前に刊行しなかった。訳者はその理由として、『ラップランド旅行』の内容は、リンネの著作に一貫した、聖書に従属した世界像とはあまりに異なっていたからだと考える。リンネは『自然の体系』とその後の著作で、自然の全てを神による創造にゆだねた。そして当時の学会では脚光を浴びた。

一方で訳者は、『ラップランド旅行』にそが、若きリンネがキリスト教の世界観から解放され、自由に観察して発想した独創的な内容であると指摘する。そして18世紀半ばに自然と人文の両面にわたる地域調査の成果を挙げたリンネの『ラップランド旅行』は、近代地理学前史に記されるべきと評価する。たしかにリンネのラップランド探検は、近代地理学の祖の一人とされるアレキサンダー・フォン・フムボルトの南米調査と比べると、方法論もなく成果も限定的である。ただしフムボルトは、リンネのラップランド探検の70年後に、リンネの時代よりはるかに進んだ科学的知見を生かすことができたのである。訳者は、1741年に執筆されたリンネの調査旅行論における「地理学者は時に自然によって形成された地域を扱い、時に微細な人間の働きを扱う」という記述から、リンネは自分が地理学者だと認識していることを指摘した。そして『ラップランド旅行』におけるサーミとフィン人入植者の生活や、スウェーデン政府の政策、キリスト教会の活動の記述が、生物分類学的成果と並ぶ地理学的成果だと評価した。

書評子は、リンネによる300年前の北欧探検記と、現在の熱帯生態学や日本の私たちの生活との接点を指摘したい。

第一に、北欧諸国で認められている、他人の土地に自由に立ち入り自然環境を享受できる万人権である。万人権が強固な私たちで存在するノルウェー・スウェーデン・フィンランドにおける自然資源利用は、コモンズ論の視点から分析されてきた(嶋田・齋藤・三俣 2010)。万人権は、長い歴史的経緯と自然地理的条件を背景に、慣習として生み出されてきたものであるが、現在は法制化されている。本書には、万人権が法制化される前のラ

ップランドにおける先住民サーミとフィン人入植者の自由な土地・資源利用の実態が描かれ、コモンズ論を考える上で興味深い。

第二に、リンネが着目した北欧の豊かな木材資源である。現在、OECD加盟国中の森林率は、上位から1位フィンランド(73.7%)、2位スウェーデン(68.7%)、3位日本(68.4%)である(林野庁 2020)。2019年の日本の丸太・製材の輸入量をみると、丸太は北米産(アメリカ合衆国とカナダ)が大半(79%)を占め、製材は欧州産(45%)、そのうちフィンランド産が16%、スウェーデン産が13%)と北米産(30%)が多い(林野庁 2019)。また北欧産の木製家具は、その品質やデザインが好まれ、日本に多く輸入されている。1943年にスウェーデンで創業したIKEA(イケア)は、世界最大の家具メーカーの一つと評され、東南アジアや日本にも進出している。

第三に、リンネが雪山で寒さに震えながら考える「寒帯とは何か」という問いである。当時は高山の低温が低気圧によるものと理解されていたことを考えると、純粋な気候学上の問いのようにも読める。しかしサーミやフィン人に寄り添う詳細な記述からは、リンネの思考の背景にある、人と自然の関係への強い探求心が感じられる。そして「寒帯とは何か」というリンネの自問は、「温帯とは」「熱帯とは」という問いになって、現在の私たちに投げかけられる。科学の知見がリンネの時代より飛躍的に増えた現在でも、その問いへの満足のゆく答えはまだ出されていないかもしれない。

参考文献

- アナ・チン(著)・赤嶺淳(訳) 2019.『マツタケ不確定な時代を生きる術』東京:みすず書房。
- 嶋田大作・齋藤暖生・三俣学 2010.「万人権による自然資源利用—ノルウェー・スウェーデン・フィンランドの事例を基に—」『ローカル・コモンズの可能性』: 64-86. 京都:ミネルヴァ書房。
- 山中勝次・會見忠則・万佳宇・曹暉・陳明杰 2011.「アジアのマツタケおよびマツタケ近縁種の宿主樹木」日本きのこ学会誌 第19巻2号:79-87.
- 林野庁 2019.「2019年木材輸入実績」
<https://www.rinya.maff.go.jp/j/boutai/yunyuu/attach/pdf/boueki-3.pdf> 2020年12月30日アクセス。
- 林野庁 2020.「世界森林資源評価(FRA)2020メインレポート概要」
<https://www.rinya.maff.go.jp/j/kaigai/attach/pdf/ind-ex-22.pdf> 2020年12月30日アクセス。

書評

木本植物の生理生態

小池孝良・北尾光俊・市栄智明・渡辺誠 編. 2020年. 262pp. 共立出版(価格: 3,600円+税, ISBN 9784320058125)

Book review *Physiological Ecology of Woody Plants*. By KOIKE Takayosi, KITAO Mitsutoshi, ICHIE Tomoaki, & WATANABE Makoto (Eds). 2020. Kyoritsu Shuppan Co., Ltd., 262pp.

GoTo 熱帯林 「木本植物の生理生態」の歩き方

山田俊弘(広島大学大学院統合生命科学研究科)
YAMADA Toshihiro (Hiroshima University)

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、国外への移動が制限されています。熱帯域を国土にもたない日本に在住する研究者が、かの地で現地調査を進めるためには当然渡航が必然です。きっと、調査が一時的に停止させられてしまった研究者も多いことと思います。かくいう私もその一人で、調査の再開を待ち焦がれながら一年がたとうとしています。

一方、移動の制限の影響を受けるのは渡航を伴う調査だけではありません。観光目的の海外旅行の実施も同じように厳しい状況です。旅行が趣味の私には、この状況もつらいものがあります。

さて、思い返すと旅行にはガイドブックを携えて行ったものでした。ガイドブックには訪問先の様々な情報、例えば訪れるべき施設や名物料理、絶景ポイントなどが紹介されていて、旅行を楽しむ手助けをしてくれます。旅行が一時お預けとなっている今、私は次の候補地のガイドブックを開いては、思いをはせる日々を送っています。

……一向に書評が始まる気配のない状況に不安を感じられるところかと思しますので、ここで本の紹介を始めさせていただきますが、その前にお断りさせていただきます。私が今から紹介する本は、熱帯林に関する旅行ガイドブックではありません。木本植物の生理生態学の解説書です。しかし私は、本書と旅行ガイドブックとの親和性を感じずにはいませんでした。

小池孝良らが編集した本書は、新進気鋭の若手研究者から重鎮まで、48名が執筆を担当しています。その分野を紹介するに最適な著者が並ぶ、贅沢なオーダーが組まれているというわけです。読了後の私の感想は、「これは、その分野に長けた研究者がガイド役となり、当該分野を俯瞰するに最適な“スポット”へ読者をいざなう本だ」というものでした。ここに、私が本書にガイドブック感を覚えた所以があります。

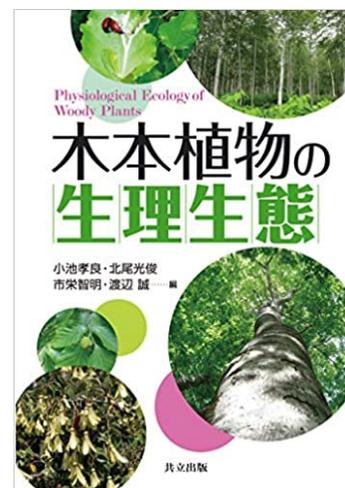
全11章からなる本書がカバーする内容は広範です。ここで、章タイトルだけ紹介しておきましょう。

- 第1章 森林の保全生態
- 第2章 地域変異と生活環の制御
- 第3章 樹冠と林冠の構造とその発達・維持
- 第4章 光合成作用
- 第5章 光合成産物の分配
- 第6章 木部の構造と機能
- 第7章 木本植物の窒素利用
- 第8章 安定同位体から見た森林樹木
- 第9章 繁殖
- 第10章 生態系修復
- 第11章 変動環境への応答

このように、章タイトルからでも本書が多様なトピックを扱っていることをうかがい知れます。これに加えて、一つの章の中でも、新旧の多彩な話題が扱われていて、例えば最近注目を集めつつあるBVOCs(生物起源揮発性有機化合物)から今や伝統的となりつつあるパイプモデル理論までが解説されています(節見出しまで紹介するのは誌面の関係で控えることにします)。

また、扱われるトピックの多様さだけでなく、それを眺める視点の多様さも本書の特筆すべき点です。つまり、木本性植物の生理生態学に関する知見の紹介に止まらず、それらに基づいた生態系修復や変動する環境への応答までが議論されています。

トピックスと視点。この両面の多様性が本書のひとつの“ウリ”でしょう。



多様なトピックが多様な視点から紹介される本書は、章の順番にこだわらず、どの章からでも読み始めることができます。読者の興味のある分野を扱った章からページを開いてはいかがでしょうか。

実を申し上げますと、本書の内容は熱帯林に特化したものではありません。むしろ、熱帯林という場にこだわった話題は少数です。とは言え、視点を変えれば、熱帯林に当てはまらない話題はひとつもありません。読者の研究地、研究対象、研究テーマと重ねながら、すべての人がすべての章を楽しむことができると思います。

本書がカバーする多様な内容は、わずかに二百数十ページほどにまとめられています。当然、一つ一つの話題についての説明は限られています。したがって、各章の分野を極めるに十分な知識が得られる、とは紹介しにくいです。むしろ、その分野の専門家が、外してはならない内容・情報を手際よくガイドしてくれる内容だと考えたほうが良いでしょう。より深く学びたくなった場合は、読者自身が自学を進めなければなりません。

ただ、編者らはあらかじめそのように本書をデザインしていたようです。というのも、それぞれの章では、文献がたくさん引用されていますし、巻末には専門書や解説書が紹介されています。こうした情報を頼りにすれば、驚くほど効率的に自学を進めることができるでしょう。

少しだけ気になった点もありました。48名もの著者が参加しています。章によっては複数の著者が分担して執筆されているものもあります。このため、私はいくばかりかの読みにくさを感じたこともありましたが（これについては文章や文末表現の不統一のせいではなく、執筆者間の“こだわりどころ”の違いのためと感じましたが）。

先にも書いた通り、私の現地調査は一時停止中です。本書を読みかえしながら再開を待つことにでもいたしましょう。本書により与えられる新たな知見と視点により、もう見慣れてしまったミャンマーやマレーシアの森林が、次回訪れるときには違って見えるかもしれません。

編集後記



この冬は大学キャンパス内の植栽木にも自動撮影カメラを設置してみました。あまり期待していませんでしたが、ほとんど鳥が来るのがなさそうなトベラでも積雪が増えた1月上旬になるとヒヨドリ、ムクドリ、キジバトなどが記録されました。トベラ種子の特徴であるネバネバのせいか、すぐに呑み込めず食べにくそうです。糞を見てみると、このネバネバした粘着質はなくなっていますが、どの程度、鳥たちの栄養になっているのか、よくわかりません。2月上旬には、キャンパス内のトベラもすっかり食べつくされてしまいました。あんまりおいしそうには見えませんが、満腹感は得られるのかもしれない。

写真: 石川県立大学キャンパスでトベラをついばむヒヨドリ(2021年1月18日撮影)。

ニューズレターへの投稿は、編集事務局: 北村 (shumpei@ishikawa-pu.ac.jp)・百村 (hyaku@agr.kyushu-u.ac.jp) へ。

日本熱帯生態学会事務局

〒739-8529
広島県東広島市鏡山 1-5-1
広島大学大学院先進理工系科学研究科
Tel & Fax: 082-424-6929
E-mail: jaste.adm@gmail.com

The Japan Society of Tropical Ecology

Graduate School of Advanced Science and
Engineering, Hiroshima University
1-5-1 Kagamiyama, Higashi-Hiroshima, Hiroshima
739-8529, Japan
Tel & Fax: +81-82-424-6929
E-mail: jaste.adm@gmail.com

日本熱帯生態学会ニューズレター 122号

編集 日本熱帯生態学会編集委員会
NL 担当: 北村俊平 (石川県立大学)
百村帝彦 (九州大学)

NL 編集事務局

〒921-8836 石川県野々市市末松1丁目308番地
石川県立大学 生物資源環境学部
環境科学科 植物生態学分野 (C210)
電話: 076-227-7478, FAX: 076-227-7410 (代表)

発行日 2021年2月25日

印刷 創文印刷工業株式会社 電話 03-3893-0111